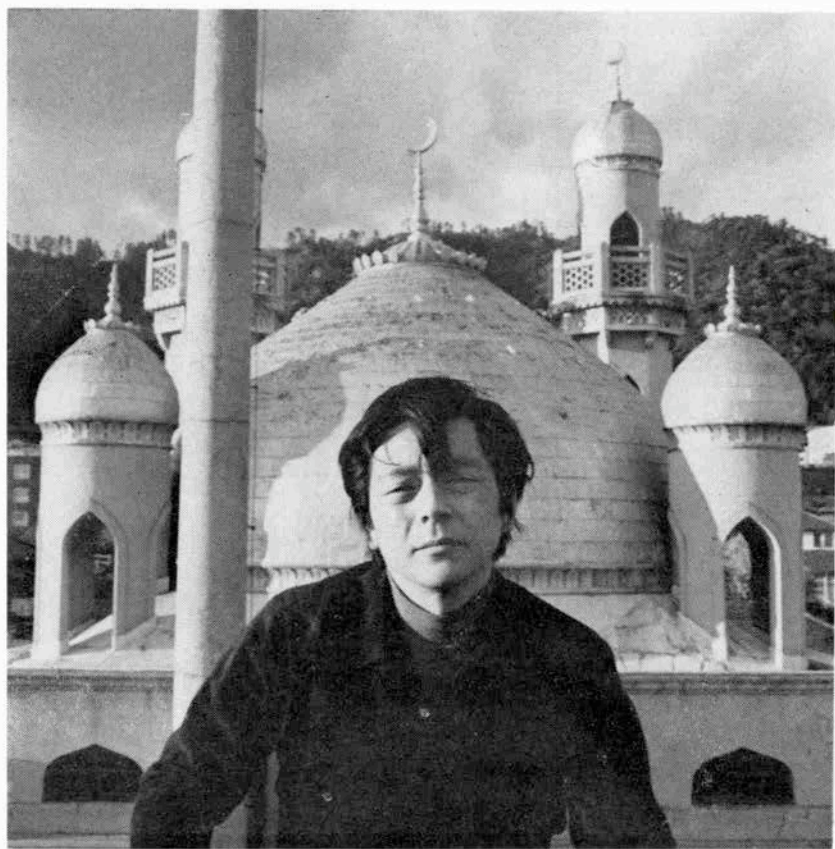


MY・KOBÉ 1

中山手・山本通り

筒井 康隆 カメラ・杉尾友士郎



ぼくはこの教会のモスクが好きだ。

「ただいま、おいしいコーヒーがはいりました」
喫茶店の入口に、よくそんな貼り紙がしてある
あれは泣かせる文句である。コーヒー好きにはこ
たえられないせりふである。ほくなどは、たった
今コーヒー専門店から出てきたばかりであつても
あの貼り紙を見るとついふらふらと入ってしまう
まして、のどがかわいていて、切実にコーヒー
が飲みたいと思ひ、血走り眼で喫茶店を物色して
いる時に香ばしい匂いが鼻腔の奥を突きあげ、同
時にこの貼り紙が眼についたとしたらどうなるか
ただごとではすまない。

まず立ちどまる。眼が大きくなり、瞳孔が拡散
する。口が半開きになり、頬にはだらしないう
すら笑いが浮かぶ。赤い舌がとび出してへらへら
と躍り、よだれが約一合流れ落ちる。もはや他の
何ものも眼に入らず、人をつきとばし、足もとに
いる子供や犬を踏み殺してふらふらとドアに近づ
き、それがガラス・ドアであればぶち壊してここ
がこむ。

ほくが神戸の町を好きなのは、コーヒー専門
でなくてもコーヒーのうまい喫茶店が大変多いか
らである。だから神戸の町を散歩しろと言われ
たら、四時間でも五時間でも歩きまわっている。一
週間経ったらコーヒーの飲みすぎで死んでいる。

最初はず、中山手・山本通りをぶらつくこと
にした。この通りはおかしな通りであつて、山側
の並びが山本通り、浜側の並びが中山手通りであ
る。一本の通りにふたつの名がついているという
ことになる。

この通りを西から東へ歩くことにした。
まず浜側に「相楽園」がある。この中には重要

文化財の旧ハッサム邸がある。欧風の廬舎はなか
なか風情があつてよい。広い日本庭園の池には白
鳥が泳いでいる。ここはパーティなどをする時に
貸してもらえそう。夏の夕方から夜にかけて、こ
こを借り切つて乱交パーティなどすれば面白
いと思うが誰か一緒にやる人はいないか。

神港高校の向かい側に、目立たないが「コンバ
ル」という洋菓子店があり、このケーキは非常
にうまい。親父さんと息子の二人でやつている。
親父さんは膝に水がたまつたとかで不在だった。
ほくも膝関節炎だが、まだ水がたまるほどではな
い。余談だが、水を抜く時は非常に痛いのだそう
である。膝の皿の裏側へ注射器の針をぐいぐい突
っ込んで、ちゅるちゅると水を抜く。たいして悪
くない時は透明の水が出てくるが、悪化している
と黄色く濁つた水が出てくる。なぜ黄色く濁つて
いるかというと、これは骨の関節の間の、いわばパ
ツキング・ゴムの役割を果たす部分がどろどろに
溶けているからである。なぜ溶けるかというと、
話をもとに戻す。

ほくの女房はここから少し山手にある山手女子
短大の卒業で、在学中、昼休みには中山手商店街
まで、おかずを買いに来たそうである。その頃の
女房に会つて見たいと思うが、望むべくもない。

その中山手商店街のはずれに、「デリー」とい
う、カレー専門店がある。これも一見大衆食堂風
の目立たぬ店だが、ここのカレーは特に辛くてう
まい。数種類のカレー・ライスの他に、印度ス
プ、印度せんべいなどがある。ほくはミンチ・カ
レーを食べたが、今度はドライ・カレーを食べに
行きたいと思つている。



山本・中山手通りを西から東にあるくことにした。

理もうまかったと記憶している。
トア・ロードを横断すると浜側に神戸回教会がある。ほくはこの教会のモスク（尖塔）が好きで、グラビア撮影の時はいつもこの前で撮ってもらう。もつとも、このあいだモスクワへ行ってきたから、以後モスクには食傷気味であるが。

神戸女子短大の向かい、山手側にある「ティファナ」はメキシコ料理の店である。この店の人たちは以前「商売繁昌」というテレビ番組で顔をあわせて以来の馴染である。タコスというメキシコ式お好み焼が名物料理で、マスター以下店の人たちがギターを弾き、トリオ・ロス・パンチョス等のナンバーを歌ってくれる。中西勝画伯の果なのだそうです。

次の通りを山手へ折れ、少し坂を上ると右側に「モーツアルト」というコーヒー専門店がある。このコーヒーはどろりとしたドリップであって、うまいものだから胃に悪いとは知りながら、ついがぶがぶ飲んでしまう。店内ではのべつハープシコードでモーツアルトだけが流れている。客のひとりひとりに異なった種類のコーヒー・カップを出すのも売りものらしい。

浜側にあるステーキの「露皮」あそがわは有名で、まだ食べにきたことはないが日本一のステーキを食べさせるのだそうだ。

北野小学校の向かい側に「よ志川」という料理屋があり、ここへは専売公社が主催している「神戸ばっばクラブ」（パツバとタバコをふかすニコ中文化人の会）の集りで来たことがある。建物は古くてくすんでいるが有名な店なのだそうだ。料



店内ではのべつハーブシコードでモーツァルトだけが流れている。

このあたりやけにホテルが多い。いずれもつれこみホテルである。女子短大や教会がつれこみホテルと同居しているのは異様な眺めである。最後にこのあたりのつれこみホテルの悪口を書く。

以前ある女性と、このあたりのつれこみホテルの一軒に入った。やり手婆あのような女中が日本間に案内した。小さな部屋で、布団もなんとなく汚らしい。

あいにくぼくは「セックスさえできればいい」という性質ではない。ムードを重んじる方である。「洋間に変えてくれ」というと、「洋間なんか、

おまへん」という返事。「じゃあ帰る」といって帰りかけると、女中は唇を歪めて毒舌をはき散らした。「ふん。氣い悪い。どこでするつもりや知らんけど」

最近ではモートルの方が、雰囲気としてはずっと豪華である。設備や仕掛けも凝りに凝っている。女中と顔を合わせることもない。このあたりのつれこみホテルの質が次第に低下し、サービスがひどくなったのも、モートルにいい客をとられてしまったからであらうとぼくは考えるが、あなたは どう思いますか。

〈作家〉

——次回はフラワー・ロード

'73

あけまして
おめでとう
ございます



バウムクーヘン



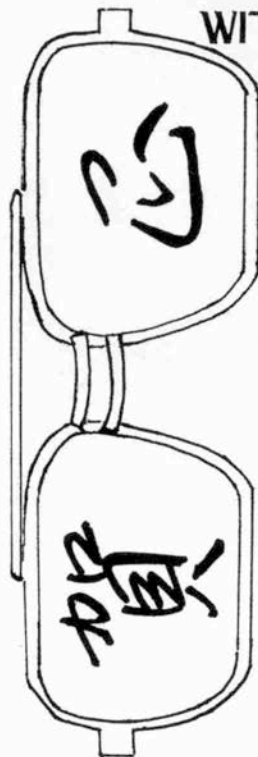
北欧の銘菓

ユーハイム・コンフェクト

本 社・工 場 神戸市東灘区東町1 (市立美術館東隣) TEL 221-1164
三宮センター店 三宮センター街1丁目 (洋菓子・喫茶・レストラン) TEL 331-2421
さんちか店 神戸三宮地下街スイーツタウン TEL 391-3558

旧年中は色々と御愛顧をいただきました事、深く感謝致します。
新年に際し、皆様の御多幸を
お祈り申し上げます。

**MAKE UP
WITH ROYAL**



 **神戸眼鏡院**

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212 代表
三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874~5

★特集「神戸と福祉」〈1〉座談会

生涯福祉の時代へ

関 外余男 〈兵庫県社会福祉協議会会長〉

村山盛嗣 〈賀川記念館館長〉

服部 正 〈大阪社会事業短期大学教授〉

藤本 隆 〈青陽養護学校教諭
誕生日ありがとう運動主宰〉

★遅れている神戸の福祉行政

関 昨年私の所の社会福祉協議会で、兵庫県の社会事業の先駆者に関する「福祉の灯」という本を作ったのですが、それを見ますと、明治以後の社会福祉に尽した方は神戸に関係する方が三分の二以上になるようです。兵庫県においては、早くから神戸市が中心のようですね。というのは、都心に人が集まると、社会現象の種々の問題が現われ、従って福祉の問題も集中して起るようになってきたからだと思うわけです。大都市はどこにでもいえるのですが、神戸市も社会事業と明治の初めから切っても切れない関連があるのです。



福祉の夢を語り合う出席者

つとしてはおもしろいものがあるわけですが。ところが、日本全体から考えると、神戸の福祉は立ち後れているようですね。関 全体の水準は、神戸は高いとはいえませんが。

服部 富崎市長さんも、その立ち後れを取り戻そうと努力され始められたようですが。神戸がやっているのは、何とか遅れをとり戻すことと、神戸だけのユニークなものを出そうということとを平行させているように、悪戦苦闘しておられるのが行政の立場でしょう。現場のケース・ワーカーから見れば、他都市との遅れが、もっとはつきり打ち出されるでしょう。最近では、いろいろ対策が出されているようですが、要するに、神戸の福祉が、全体のバランスをとって、先頭を切れるようになるには、まだ時間が必要ですね。

今日の神戸の福祉活動をみますと個々の点については藤本先生のやっておられる「誕生日ありがとう運動」や「家庭養護寮」とか、「障害者の保険制度」をいち早く取り入れたとか、評価していいこともあることはあるのですが、神戸市ゆえに、という面で注目すべき施設なり運動なりがあるかというところでしょうね。

服部 関先生のおっしゃる通りですね。例えば賀川豊彦に象徴されるように、ユニークな人物を神戸は出していますね。戦後のものでも民間の運動を見ますと、一つ一

関 施設を例にとってみますと、民間のものでは古くからの歴史を持つものがあるんですね。神戸養老院とかたくさんさんの児童施設とか。その点では、なかなかいいんですよ。施設の観点から見れば、戦前は公の施設は、ほとんどないんです。で、戦後、市の経営のものをやらなきゃいかんのだといわれてきたようで、神戸市もやっているんです。しかし、施設だけの点を考えても、よその



服部 正さん

★神戸に流れる賀川精神

村山 神戸というのは、何か開拓的に新しく始めようとすることに対する周囲の理解という有難い面があると思うのです。が、粘り強さに欠けているというのか、せっかくの気持ちだが、どこかへ移ってしまうような、そんな気がするんです。神戸のスマートさなんですか。

関 神戸というのは自由なところですから、この出身か、という事を問題にしない。そういう自由な中で、新しいものが育ち、花を咲かせていけばいいんだけど、どうもそれまでに進まないんじゃないでしょうか。

それはともかくとして、割合に自由な土地ですよね。

村山 やろうと思えば、好きなことができる。よければ応援してくれます。新しいことがはじめやすいところですね。

賀川豊彦先生は、一つのところで一つのものを育て、

いい仕事をしようという発想はなかったようです。運動的というか啓蒙的というか、いろんなところに作りながら、神戸だけということでなしに、日本全体というレベルでやりましたから、先生の精神が、どこでどうとはいにくいのですが、事業として残っているのは、私の所の賀川記念館と灘生協でしょうか。先生の発想が影響してきたものが多いわけです。

形の上では生協が実を結んでいると思いますね。いい、悪いの問題は別にあるかもしれませんが、灘生協があそこまで育ったということです。

村山 ちゃんと組織まであのようになったことでは、かなりいい面がでてきているようです。

服部 市だとか、何だとかを頼らずやっていく野党精神のようなものがあるわけですね。亡くなられた佐野芳雄さんの労働金庫もやはり賀川精神が見られるんですね。

どちらにしても日本で最初に発祥し、日本で一番大きなものになっているわけですが、それから思うと、必ず



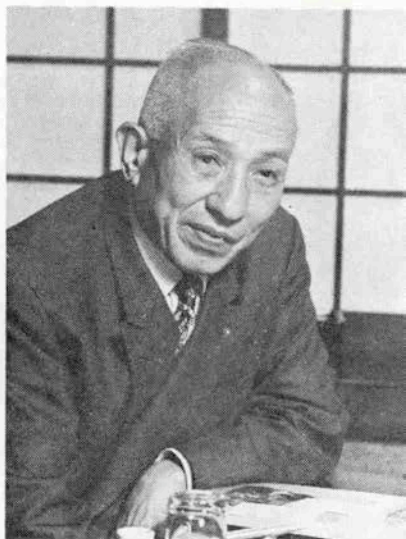
村山 盛嗣さん

大都市と比べてみるとまだまだ進んではいけませんね。服部 公立施設の貧困という問題は本当に残念です。老人の病院等も、東京都には舌を巻くような素晴らしいものが出来ていますものね。

全体としての福祉が遅れているから、いろいろな運動が目立ち、アトラクティブに思えるんですね。全体にレベルアップすれば、個人の善意だけが光らなくて済むんです。これが今の神戸の状態じゃないでしょうか。

藤本 新しい制度ができて、後が続かないように思いますね。せっかく生まれた運動も、ちゃんと肥料を与えないから、どこかで消えてしまうみたいなの……。

服部 そうなんです。それは同感ですね。



関外余男さん

★ヒットした「恍惚の人」と老人問題
服部 有吉佐和子さんの「恍惚の人」は非常に多くの人に読まれたようですが、単に文学作品として読まれただけでは無いでしょうね。

しも神戸っ子が薄っぺらともいえないと思いますね。
関 古くから続く各施設では、それぞれの伝統をもってやっておられるわけなんですよ。

村山 そうなんです。最初、皆が、開拓的な仕事をしたわけなんです。今もそういった意味でやっているかという疑問なんですね。

新しいことをやると、割に市が援助してくれる事もあるんです。ところが、国が決めた基準より上回ろうとするところもよくないですね。充分ではないと思うのと、贅沢だと思えるのと、喰い違いが感じられますね。

服部 どこかで国の基準に追いつくのでなく、追い抜くところを見せていかなければならないでしょうね。



藤本隆さん

「昨日まで、他人のことだと思いが……」という、あれですね。特殊な世界を覗くのではなく「俺が差込むのか、これはたまらん」という気持ち。どこか家庭でも、事実起こっている問題を扱っているわけです。
関 ベストセラーになったということなんです。私は、あの本が老人福祉の上に、大変な貢献をしているんじゃないか、と思いますね。ああいう題材を捕えて書いたという事は、非常に現代の時局にマッチしているように思いますね。私の様に社会事業に関係している者の立場からいえばそう思います。ホームヘルパーの充実、という形になって表われるか、老人に対する地域福祉事業の推進になるか、施設を整備する形になって表われていくか、いろいろな形で現実表われてくると思いますね。

服部 もう一つ、あのヒットの背景というものを考えますと、日本では老人福祉は、特殊な階層の老人の福祉として、受け止められていたわけです。

ところが、あの本では、どこの家庭にも起り得る問題として出てきたわけです。

だいたい、どの世紀にも、その時代の代表的な病気は四分の一の割合で人を死なせているんですよ。十三世紀のペストがそうだし、ずっと下がって、ある時代の

梅毒、十九世紀の結核もそうです。今世紀になると、癌、心臓病などの成人病が、やはり四分の一の割合で死因になっているわけです。それが追いつめられていった場合に、残った人が何で死ぬのか、ということになりますね。

天寿を全うすると、「恍惚の人」になるという可能性を皆が感じはじめたわけですよ。そこで、老人福祉という問題が初めて特殊な問題ではなくて、皆が福祉の対象者になる可能性がある、そういうことを訴えたというおもしろさがありますね。

★大切な福祉教育とボランティア活動

藤本 これからは福祉の精神を浮わつたものでなく、お腹の底から湧いてくるようなものを育てていく福祉教育を考えなければならぬんじゃないでしょうか。

学校教育や社会教育において、福祉というものをもう少し深く理解する機会を、と思いますね。幼児期の家庭教育の段階から、また、中学、高校の時期に、直接施設を訪れるとか、根強く定着した福祉を望みますが……。

関 そうですね。福祉教育というのは、それが根本だと思っていますね。

藤本 かわいそうだ、という見方から入って、もちろん責める発想ではありませんが、それから少しでも発展しないように思えるんですね。すぐにとどまってしまうんです。市民大学会館などで、定期的な福祉の講座をもつとか、ボランティア活動の講座をもつとか、一つ一つを積み重ねていければ、と思うんですが。

関 私も福祉教育に力を入れなくてはいけない、とはよく知っているんですがね。

藤本 高校生なんかと対話集会をやると痛切に感じますね。一生の進路を決める中学、高校の時期に正しい認識と理解をもってもらいたいものです。百人に一人でも一生を社会福祉に賭けようと心底から思ってくれる人が現われてくれれば……と思います。

関 有吉佐和子さんが、教育審議会で、学校の生徒に社会科の実習に施設を回ったりさせればどうかと発言されましたね。カリキュラムに入れることまではなかなかと思いますが、クラブ活動等に、ボランティア活動にもっと興味を持つように取り入れるとか、先生方に導いていただくとかね。

神戸市が、そういう点でよその都市に勝るものを示してくれれば、と思いますね。行政の者が考えれば、学校の教育者が考えれば、でなく皆が考えなければいけないことなんですよ。

藤本 それから、週休二日制がとられる所もふえて、余暇ができるわけですが、その利用と、ボランティア活動などと結びつけられてもいいと思うんです。余暇を自分のレジャーのためにだけ使うのではなく、社会的なもののためにという気運が欲しいですね。

服部 社会福祉は相互扶助だ、ということなんです。そういう割り切り方ですね。

身体障害者が特別な不運にまわられた人という考え方、とんでもないことなんです。今のようになら化学スモッグの被害者になっただけで小学生でもクライエントになってしまうわけですね。

個人の問題でなく地域としての問題です。また、車公害。いまや交通事故による死者は原爆による死者と同じだといえます。今は、十人に一人ですが二十世紀には五人に一人ですよ。一生のうちで何回か身障者になる事も考えられるわけです。だから、他人の問題ではないのです。

福祉にしても相互扶助といえるわけですね。そういう割り切り方です。又、精薄児の問題にしても、あれは遺伝によるものは十のうちの一つです。あとは後天的な原因によるわけです。たとえば犬や猫から感染するトキソプラズマ症のように、原虫が体に入ると、生まれた子供が小頭症であったりするんです。そういった環境の中に生きていくのだという自覚ですね。そんな感覚を持てば、

福祉というのは特別なことじゃなく、ユネスコでさんざん流行ってますが、生涯福祉の時代になってきたということです。

それから今は週休二日制が云々されていますが、この先二十一世紀になる頃には、週休四日制になったりして余暇が本暇になり、労働が余暇になったりするんじゃないですか。

そうすると、楽しみなどという感覚が失くなり、人々はノローゼになってしまふ。そこで再び人間関係が重要視されるように思いますね。核家族として、子供まで押し出し、哺乳瓶片手に東名高速に子供を置き去りにしたりする所まで追いつめられたものが、今度は子供を中心とした一家の団らんや老人の面倒を見ることが義務ではなく、喜びとなってくる。そこで、そういった楽しみとして出てくるのがボランティア活動じゃないでしょうか。義務でも、奉仕でもなく。

藤本 そうなんですよね。ごく、自然な形としてね。

服部 一億総ボランティアの時代が来たら、おつちよこちよいの神戸市民は先頭をきって、百三十万総ボランティアになるんじゃないでしょうか。

先日でも神戸市の企画局長に申しあげたんですが「神戸市ボランティア局」を作る準備をしていたみたいとね。民生局でなく、ボランティア局を。

藤本 そのくらいでなくてね。

服部 あらゆる主婦が、ボランティアがレジャーなんだと考える時代ですよ。今年の初夢みたいなのですが、レジャーがボランティアなわけですよ。

たとえば、身寄りのない老人のための給食センター。イギリスなどでは、給食センターで食事を配給しているのは、仕出し屋さんではなく、ボランティアなんです。そこに意味があるんですよ。仕出し屋さんの「毎度ありい」でなく、「今日は。あったかいごはんですよ。」の一言。そこにお年寄りは生きがいを感じてくれるんです。イギリスのそのボランティアは、新婚早々の若い主

婦や奥さん、また学生達なんです。日本で考えると神戸市民など、そういう事をやりそうな人種が一番多い気がしますね。

神戸に配食センターなんかできて、身寄りのないお年寄りに、ジャガーのマイカーでも何でもいいから運転していつて食事を配る。そういう中に喜びを見出す時代が、案外早く来そうなのがするんですけれどね。

そのあたりから七三年の神戸の福祉の構想が出てもいいですよ。まず百三十万総ボランティア時代がきてもいい。

それともう一つ、非常に大きな間違いは、よく、福祉がいき届き過ぎると人間は生きがいを失う、なんていうことがいわれますよね。その例として、ノルウェーに老人の自殺が多いことが挙げられますが、あれは全く間違った考え方ですよ。あれは、アイゼンハワーがある議会で、ああいった間違った演説をしたのが、広まったらしいんですが。福祉が行き届いているからでなく、老人年金をもらえる年令に達するまで、つまり六十五才までの自殺が多いということなんです。

福祉の考え方ということなんですけど、善意が福祉を引き出す面と、逆に、福祉が善意を引き出す面があるといえますね。たとえば、ボランティアにしても、善意でボランティアをやる人ばかりじゃないと思うんです。また「家のおばあちゃんにはしてあげられないけど、隣りのおばあちゃんのおしめは替えてあげる」とか。それでいいと思うんですよ。代わり合ってやるのもボランティアですよ。他人の目を意識してやり始めたことでも、福祉が善意を引き出している、といえると思いますね。老人の問題でももし老人に大きな年金がつくとしたら、五人の子供が、お年寄りをたらい回しにする事もなく、身辺に居てもらいたがるのじゃないかな。

人間愛が失われてきたから代わるものとしての福祉ということじゃなく、福祉が人間同士の愛や善意をかき立ててくれるとかいったことになるんじゃないです

か。そういう面で、神戸にはボランティア活動をやる下地があるような気がしますね。現状のような形になっている老人問題も、神戸だけでも逆の形にもっていきたいですね。

藤本 ボランティア活動ですが、近頃は、割りにそういう気運が高まり、ほとんどの方がやりたいという気持ちを持っておられるようなんですが、果して具体的に、どこで、どうやるのか、という事になると、わざわざに訪ねて行ってまでは、となるみたいですね。ちょっとした予備知識なことでもあればね。

服部 そういうことはありますね。
藤本 何かそういったための窓口のようなものを行政が考えてくれるといいんですけど。

関 私は元来、社会福祉協議会の仕事をやっているわけですが、それはボランティアの仕事だと思っていますが、ボランティアセンターというものもあるのですが、余りうまく運営はされていないようです。ボランティアの問題だけを社会福祉協議会でやっていいんじゃないかという気もしていますね。神戸市で現に起っている運動を調整したりするようなこともね。

服部 誰でもやっていることとしてボランティア活動が進めばいいと思いますね。

藤本 日常茶飯事のこととして、偉いとか何とかいうことでなしにね。今は、特別の理由があるとか、環境であるとかの方が多いようですが、人々の心の奥には、そういった活動をしたい気持ちがあると思いますよ。

関 具体的には、神戸市が、ボランティアをどのように使うか研究すればいいんじゃないですか。推進していくには経費が要りますがね。まあ、そういう考え方が欲しいですね。

服部 今年中に週休二日制が確立されれば、生まれてくる余暇をボランティアのために具体的に使ってもらいたいということがありますね。

それと私は隔離反対の思想を持っているんです。特別

な何かの問題を持つ人は目に触れないところへ隔離する、みたいなことは、絶対に反対です。市民社会の中に、我々の日常生活の中に、いろいろな人を積み込み直す時が来ているように思えます。

神戸にあるいいものを行政と結びついて、福祉の遅れている神戸、という汚名を挽回できる時だと思っています。
関 婦人がもう少し力を入れて欲しいですね。どうも男では駄目なところがあるようで（笑）民生委員なども大部分女性というところになっていいんじゃないですか。それを期待しますね。

村山 上滑りのものでない、本当の意味での共同社会での運動が欲しいですね。

精神的なつながりのあるものでなくては本当のものが生まれてこないんじゃないですか。

それから、これだけの基準がないと人間らしい生活ができないというようなシビルミニマムを設定するようなことを望みますね。

藤本 福祉についての発想の転換ということを考えます。私の住む地域社会の神戸で何か具体化させたいですね。婦人団体や労働組合、青年の集まる所等で、真剣に福祉問題が取り上げられるようになってもらいたいです。

それと、服部先生のおっしゃったように施設を地域社会のと真中へ、ということを考えています。

服部 恋愛は他人を通して自分に出会うことだといいますが、福祉における愛もまったく同じだといえると思いますね。

形の上では、他人の為に共同募金をしたり、奉仕したりしているようでも、必ず、社会福祉として自分の上に戻ってくるものですから。いいことをしようとしなくても、自分の善意と出合うわけですね。

73年の神戸としては、賀川豊彦や灘生協等の実績があるわけですから、いろんな意味での可能性を引き出してもらいたいですね。
（竹葉亭にて）



呉邦陳陳
みよーや

神戸店 大丸
電話 神戸 (331321) 三三四八番
大阪店 阪神百貨店 三階
電話 大阪 (345) 九五八四番
姫路店 やまとやしき百貨店 四階
電話 姫路 ②三 一二二番

刀 剣

日本民族の象徴である美術刀剣武具甲冑を豊富
に取揃え皆様のご来店をお待ちしております。



鑑定 買入
研白鞘拵 御承処
神戸市生田区元町通6丁目25番地
刀 古骨 美術 剣術董
元町美術
〒650 TEL 078-351-0081

佐本歯科

幼児歯科・小児歯科

診察時間（予約制）

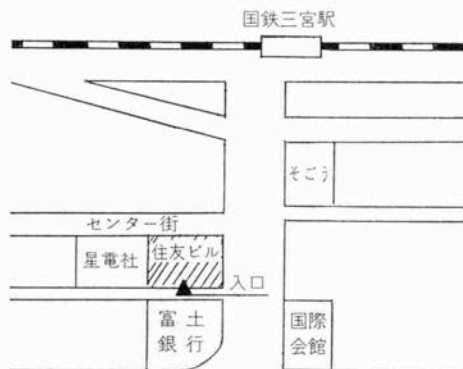
AM 9:00—PM 1:00（受付12:00まで）

PM 2:00—PM 5:00（受付4:30まで）

（土曜・木曜は午前中）

そごう前センター街東角・さんちか入口
住友銀行三宮ビル6階

TEL(078)331-6302~3



〒650 生田区加納町 5丁目39

こんにちは赤ちゃん



芦屋市大槻町／浅海佳世ちゃん

完全看護★冷暖房完備★病院前駐車可能

芦屋 柿沼産婦人科



芦屋市大槻町1番18号
国道芦屋川電停東50米(明治生命南)
☎ 芦屋 (0797) 31-1234 代表

☆技術ジャーナル ⑥⑧

溶接

諸岡博熊

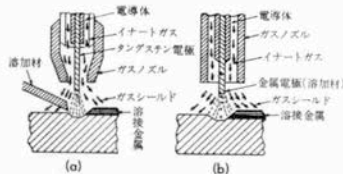
（阪神外貿埠頭公団工務部長）

紀元前約五〇〇年頃、中国では高温で二つの金属を互に強く槌打し鍛接ができるということが知られていた。

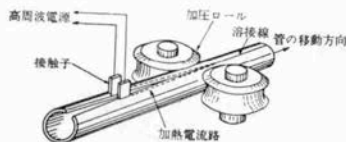
一八八七年、ロシアのペルナドス
が炭素アークの高熱を利用して溶接する技術を開発するまでその進歩はなかった。つづいて、スラビアノフが金属棒を電極とするアーク溶接法を開発した。

近代的な溶接法は二十世紀になつてからで、今日みられる、被覆アーク溶接法やガス溶接法が出て、一九四〇年代には、サブマージアーク溶接法、イナートガスアーク溶接法などの自動溶接法と抵

溶接法の分類



▲イオートガスアーク溶接の2形式



▲高周波抵抗溶接による鋼管の溶接

抗溶接法が開発され、つづいて、一九五〇年代に、エレクトロスラグ溶接、炭酸ガスアーク溶接、ノングスアーク溶接法などが出現した。

一九六〇年代には、これらの溶接法を利用して溶接の能率化や省力化が積極的に進められ、電子ビーム溶接、レーザ溶接、プラズマアーク溶接、摩擦圧接、爆発圧接などの各種エネルギーを利用する溶接法が出現してきた。したがって、現在の溶接工学では、溶接治て、現在の溶接工学では、溶接治金学という材料を対象にする分野と、溶接エネルギー学さらに、溶接力学といって、溶接継手の変形と応力と強度を対象とする三つの分野が研究テーマとなってきたる。

現在、溶接はあらゆる分野で広く利用されている。たとえば、五十万トンタンカーとか、五十階建

の超高層建築物とか、橋梁、自動車、小さいものでは、エレクトロニクスといったところである。

しかし、一口に溶接といってもそれは大きく分けると三つに分類される（表参照）ように、①融接、②圧溶、③ろう接である。

融接とは、金属の接合部を溶融状態にして溶加金属を供給するか、または、母材のみを溶かして接合する方法である。金属を溶かすために電弧（アーク）や、電気抵抗熱電子の衝撃熱などの電気エネルギーを用いる方法や、ガス炎エネルギーを用いる方法などがある。

圧接とは、接合部をガス炎で加熱したりまたは電気を流したり、超音波を与えたりあるいは、摩擦などによってエネルギーを与えるが、溶融しない状態で加圧して接合面を再結晶させて結合する方法である。

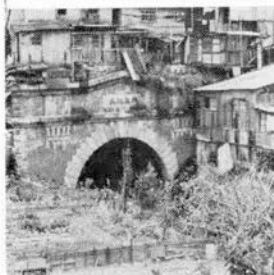
ろう接とは、いわゆるろう付けで接合される母材をまったく溶融させないで、その接合面に母材よりも溶融点の低い金属を流入させて接合させる方法である。



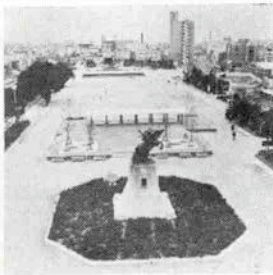
明治19年の湊川



昭和45年の湊川



忘れていた新湊川会下山
背後のトンネル



再び整備なった湊川公園

●むかし、といっても明治の中ごろまでですが、湊川は、新開地本通から川崎造船所の中央を流れていました。いわゆる天井川で、河床は地上20尺（6m）にも達し、水害の危険はもとより、市街地を二分して交通上の不便からも、その付替えが切望されていました。明治17年頃から市民の間で論議され、ようやく、私費を投じて工事を起こそうと、明治30年に「湊川改修株式会社」が設立され、同34年に全工事が完了しました。

●新しく付替えられた新湊川は、石井川と天井川の合流点から西南に流れ、会下山背後の近陵をトンネル（長さ600m）で通過し、長田神社のあたりで菊藻川に合流する約4.4kmの新しい川がつけられたのです。

それらを削削した土砂は、旧川尻の埋立（約2ha）に使われ、また、旧湊川切均地3町5畝6歩（約3ha）を市が買収して、明治44年湊川公園とし、楠公さんの銅像とともに町の広場として親しまれてきました。（神戸市史・本編各説、神戸開港百年史・建設編より）

●こうして、湊川・新開地は神戸の中心歓楽街として、おおいに栄え、現在でも神戸の中心都心の西の核となっています。

それに対して、新湊川は、一部でドブのようになり、高速道路のインターチェンジでふたをされ、バラックが背をむけているといった現状です。新開地の繁栄を支えてきた新湊川が、今度は市街地の貴重な緑地軸とし、新しい変身をとげるためには、その兩岸の計画公園の早期の実現、番町的生活環境改善再開発が必要でしょう。（小林 郁雄）

●古い木造の住宅街は老朽化していますが、そこに住む人々の旧くからの付き合いや、気安さがあり、狭い土地に程よい庭があって、色々な季節の草花を植え、猫や犬が走りまわっている捨てがたい雰囲気と情緒があるものです。

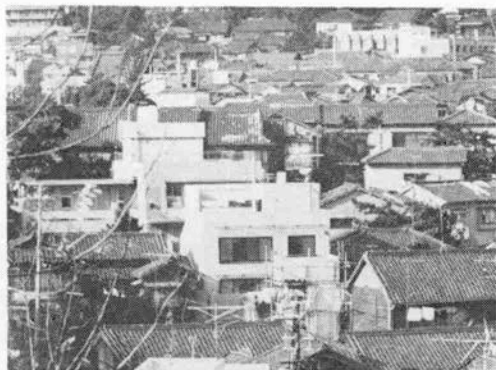
しかし、自分達の子供が結婚し今日の住宅難の時代ですから庭に家を増築し、現在では核家族ではなく年寄や、夫婦それに子供達が同じ屋根の下に住んでいます。

このような家では現代問題になっている老人問題や、夫婦共稼の家での鍵っ子の問題は自然に解決しています。大家族の良い所は他にも多くあるのですが、せっかくの庭が壊されて行き、庭の無い、また太陽の当らない住環境の不良化が進んでいます。このような状態を打破するためには狭い土地の場合は特に立体的に住む事が必要になってきます。

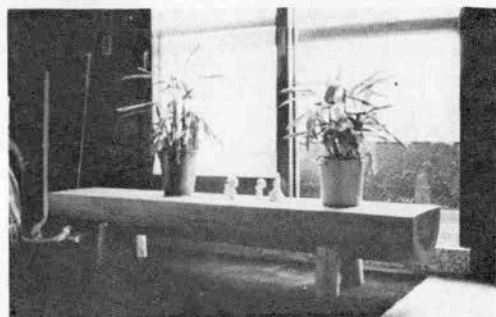
この住宅は 120㎡ 程の狭い土地に2家族で3世帯が住めるように、また狭いながらも緑のある底を確保することを目指して計画されています。鉄筋コンクリート造りとして住を具体的に積み重ね、一番太陽の当る屋上に土を乗せて畠を作っています。また将来の家族構成の変化に対して空に向っての増築を考えています。建物外部の水平な部分である土地と屋上の土地を緑で包むことによって再び旧い街の環境と、旧いが良さを持っている情緒のある環境を生かすことが出来ると思います。

老朽した住宅街を一挙にすべてを壊して、大規模に新しい住宅を作ることは、家や庭と一緒に人々の歴史や情緒、人情も壊れてしまいます。旧い街はそれなりの歴史と環境を持っています。それらの良いところを生かしながら、悪くなったところを改良していくことが大切だと思います。

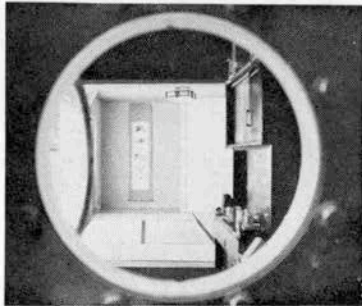
〈武田則明〉



老朽化し、住環境の劣化した住宅街に新しい環境をつくる。



窓辺の植木鉢



船のハッチのような窓から見た室内

社会福祉と

PR活動

橋本 明

アメリカの社会福祉施設を訪れて感心することは、どこへ行っても非常にわかりやすく懇切丁寧なパンフレットがちゃんと用意してあることである。しかもそれらのパンフレットは写真やさし絵をつかって誰にでもその施設や機関の活動内容が一目でわかるようになっていて、ため、社会福祉に關してずぶの素人でも容易に理解できるこうした色とりどりのパンフレットを見て気がつくことは、まず彼らがいかに自分たちの施設の内容や活動の方針を地域社会の人たちによりよく知ってもらうための努力をたえずしているかということである。

アメリカの多くの施設は民間によって運営されており政府からは一銭の補助金も受けず、経営の基盤を一般からの寄附や基金にしていると、いさかい社会へのPRにも力をそそがざるをえないのも当然のことである。が、理由はそれだけではない。

同じような種類の民間の競合機関が多数存在するアメリカでは、活動の内容、成績如何で寄附金や共同募金の配分もぐんと違ってくる。たとえば、里親委託機関にしてもシアトル市内だけで数カ所もあるため、一年間に何人里子を委託させ、何組養子縁組を成立させたかでそれぞれの機関の評価が違ってくる。

もちろん子供は商品ではないから、取り扱う人数の多少によって活動の評価をしてはならないが、しかしこれもいい意味でお互いの刺激になり、レベルの向上に役立つ場合もある。よりよい活動を行い、よりよい成績をあげるため、各機関ともよい人材を集めるよう努力もする。アメリカがプロの社会であり、社会福祉の分野においても例外ではないのも、こういう多数の競合機関の存在によってお互いの活動内容や成績が厳しく問われるためたえず自己研磨して努力しなくては経営の基盤を失ってしまうからである。慈善や同情だけでは社会福祉が一つの「事業」として成り立たないのである。そのためにも自分たちがどういう活動をしているかを常に地域社会の人々に理解してもらい、そのフィード・バックとして周りに住んでいる人達の声をたえず施設の運営に反映させていく努力を怠ってはならない。

社会福祉施設や病院を訪れると、たいいていのところは専任のパブリックリレーションズ・ワーカーをおいており、訪問客の相手をするのはこのワーカーが多いし、彼に頼めばたいいていの資料や情報は得られる。

こうしたおびただしい数のパンフレットや機関紙、PR紙を媒介として施設と地域住民とのコミュニケーションが生まれ、いろいろな形でパイプが築かれていく。施設と地域とを結ぶ大切なパイプ役としてもう一つ重要な役割をになっているのはボランティアである。

ボランティアというのは単に施設におもむいて障害者の世話をしたり、職員の手助けをしたりするだけでなく施設の活動を家庭や職場にもち帰って紹介したり、また地域の情報を施設に伝えるなど、PR活動という点からみても大切な役割を演じている。

今までのべたのは個々の施設のPR活動だが、社会福祉全般に關するPR活動もまたなかなか盛んである。

アメリカに住んで生活してみると、日常生活の中になりにいろいろな形で社会福祉のPRが入りこんでいることに気がつく。もっとも、アメリカは世界で一番マスコ



▲募金活動のためショーウィンドウに貼られたポスター

▼切手の消印やシートにみられる社会福祉のPR



ミの発達している国であり、広告量の多い国であるだけに、社会福祉のためのPRも他の国よりも相対的に多いのかもしれないし、私が特に社会福祉に関心があるためそれだけ余計に目についたのかもしれない。

それにしても、新聞、ラジオ、テレビ、街角などでかなりいろんな活動が目にとまった。テレビでは精神薄弱児のための募金広告が数秒間スポットで流されていたし新聞紙上ではボランティアの募集広告がたえず行なわれていた。

市内バスの広告には「ビッグブラザーになろう」とか「精神薄弱児を援助しよう」とかいったポスターが一般の広告といっしょにかならず何枚か掲げられている。郵便こういったポスターは街角にもよく貼られている。切手の図案や文字にもPR活動が詠われているし、切手の消印にも「てんかんの患者を雇用しよう」とか「身心障害者の工場を援助しよう」といった文字が刷りこまれていることが多い。アメリカからの手紙を受けとられた方は切手や消印を注意してごらんになるとおもしろい。ところで日本ではまだまだ社会福祉というのは一部の慈善家や奇矯な人のやる仕事であるという固定観念が抜けきらないのと、不幸にも障害をもった人たちだけのための仕事であるという考え方があるため、なかなか広く

市民一般のものとしてはとらえられにくい。広報活動にしてもしかりで、福祉というのは陽の当たらない場所、目立たないようにコッコツとやるのが美德であり、また、障害者の問題などはあまり大っぴらにとりあげられては困る、といった風潮もあるため、なかなか継続して大々的には行いにくい土壌が日本にはある。

しかし、これからの日本が好むと好まざるとにかかわらず福祉国家への道を歩んでいかねばならないことを考えると、もはや「福祉」というものが単に一部の社会的弱者の保護のみに限られるのではなく、もっと広く国民全体の生活の安定と保障という、より大きな枠の中で考えられねばならない。

そのためには日本の国家目標が福祉国家の建設におかれねばならないし、教育を通してそれを教えていく必要がある。

国民一人一人が福祉というものを自分たちの日常生活と結びつけて考えていくようになるためには、意識の転換と長い時間が必要であろうが、そのための一つの方法としてはアメリカにみられるような時間をかけたきめの細い、地道なPR活動も必要になってくるであろう。この方面の研究と活動が今後望まれるところである。